

令和元年6月10日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02856

研究課題名(和文) 日清戦争時、第2次東学農民戦争の現地調査と戦争史の再構成

研究課題名(英文) Research and reconstruct on the Second Donghak Peasant War in the Sino Japanese war

研究代表者

井上 勝生 (INOUE, KATSUO)

北海道大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：90044726

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：日清戦争の際に、日本軍は、抗戦する朝鮮東学農民軍を殲滅する作戦を展開した。韓国現地の詳しい現地調査によって、兵士の「従軍日誌」に記述されていた日本軍の東学農民軍に対する軍事作戦を復元した。そうして日本軍部隊が、殲滅作戦を実行し、街や平野や丘陵や溪谷や山城で、東学農民軍の兵士を捕らえて殺戮し、村を焼き払ったことを確かめた。東学農民軍殲滅作戦に参戦した兵士の「従軍日誌」全文を学術雑誌に公表することもできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日清戦争は、日本と清国との戦いと説明されてきたが、朝鮮全域で朝鮮東学農民軍が、侵入する日本軍に再蜂起し、日清戦争最後まで、抗戦を続けた。日本軍は、殲滅命令を出して部隊を派遣し、殲滅作戦を実行したことが日韓の学界で明らかにされてきた。東学農民軍に、朝鮮農民が広範に参加し、農民軍は、数十万名におよぶ戦死傷者をだした。この歴史を韓国の研究者たちと協力して探究している。このようにして東学農民戦争と日清戦争の歴史を明らかにすることは、アジアの平和構築に役立つところがあると思う。

研究成果の概要(英文)：During the Sino-Japanese War, the Japanese Army aimed to annihilate the resisting Donghak Peasant Army. Based on our detailed fieldwork in Korea, we were able to reenact the military operations of the Japanese Army against the Peasant Army, as described in the Soldiers' Campaign Journal. Thus we have verified the fact that the Japanese campaign was indeed one of complete annihilation, carried out in the city, as well as in the plains, hills, valleys, and mountain castles, by capturing and killing the members of the Peasant Army and burning their villages. We were able to make the full text of the soldiers' "Campaign Journal" public.

研究分野：日本史

キーワード：東学農民戦争 日清戦争 日本近代史 軍事史 朝鮮史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、これまで、討伐日本軍が編成された四国4県を現地調査し、戦死兵士追悼碑や個人蔵の兵士「従軍日誌」などを見いだした。なお探索をつづけ、兵士「従軍日誌」にもとづいた韓国での現地調査が必要であった。

(2) 防衛研究所図書館「千代田史料」はデジタル未公開で、旧参謀本部の重要史料が多数あり、日清戦争直前に参謀本部が印刷・配布した20万分1彩色、南北2枚「朝鮮全図」などを見だし、研究発表した。探索・調査がなお必要であった。

(3) 今の北朝鮮、北部の東学農民軍を討伐した日本軍が、東海・北陸地方で編成された部隊、後備第6聯隊であること、岐阜県出身の兵士が中心になったことを地方新聞などから見いだした。この調査もなお発展させる必要があった。

### 2. 研究の目的

(1) 討伐軍兵士「従軍日誌」2点を見いだしていた。兵士は「陣中日誌」など日本軍公式記録に記されない討伐戦や凄惨な戦況を記していた。兵士「従軍日誌」を、軍公式記録などと比較検証し、また韓国現地の調査によって、農民戦争をさらに実証的に明らかにし、「従軍日誌」を、学術雑誌に復刻、史料紹介することも目的であった。

(2) これまで、現北朝鮮地域東学農民軍を討伐したのが、東海北陸で編成された第6聯隊で、岐阜県の兵士が中心と分かっていた。北部東学農民戦争の実態は分かっていないので、日本兵士の資料をさらに探索して、朝鮮北部の農民戦争も明らかにする。

(3) 防衛研究所図書館にて、デジタル未公開「千代田史料」から、日清戦争直前、参謀本部、印刷・配布した20万分1、南北2枚「朝鮮全図」などを見いだしていた。日本軍が、秘密測量で地形図を作成したことは近年、見いだされたが、日本軍の戦争準備と地図の戦争での活用などについて検証して、東学農民戦争を含めて戦争史の検証を深め、日清戦争史を再構成する。

(4) 「千代田史料」は、旧参謀本部史料が多数あり、兵站監部陣中日誌、電報や参謀本部報告、戦闘詳報などの調査と検証を深め、東学農民戦争と日清戦争を再構成するために研究が必要であった。農民軍「悉く殺戮」という大本営命令の発令経過なども依然として課題である。

### 3. 研究の方法

(1) 討伐日本軍部隊が編成された地域を現地調査する。地域図書館で地方新聞や市町村史を調査し、郷土史家と協力し、碑文や墓石、兵士の文書記録などを探索した。

(2) 「従軍日誌」に記録された討伐戦争は、朝鮮が戦場であり、公式記録には、記されていない討伐戦もある。韓国の現地を詳細に調査することが必要であった。研究代表者は、韓国の研究者たちと協力を続けており、シンポジウムなどに招聘されて、その際に共同の現地調査を実行していた。このような方法で現地調査をすることが実現した。

(3) 日本でシンポジウムに参加し、また日本と朝鮮の歴史に関心をもたれる市民への報告会も開催し、調査結果を報告して、地域の調査への協力をもとめた。韓国でも、各地の「東学農民革命紀年事業会」など、市民の集まりでお話しし、調査に協力していただいた。

### 4. 研究成果

(1) 徳島県吉野川市、当時、阿波郡の東学農民軍討伐に従軍した上等兵の陣中日誌、「明治27年日清交戦従軍日誌」を、全文、史料復刻し、学術雑誌『人文学報』の東学農民戦争特集号に掲載、公表することができた。兵士は、東学農民軍をせん滅するために朝鮮に派遣された後備第19大隊に配属された。同大隊は、3中隊で3路に分かれて、ソウルから東西に展開し、西南方向へ東学農民軍を包囲し、西南部の全羅南道へとせん滅作戦を実行した。筆者の兵士は第1中隊で、東路を南下し、京畿道、忠清道、慶尚道、全羅道と進撃、克明にこの作戦を記録した。原文を全文復刻し、解題を付して公表できた。

(2) 復刻にあたって、京都大学人文科学研究所開催の2回の国際シンポジウム、「日清戦争と東学農民戦争」と「日清戦争期の東アジア」に参加し、日韓の研究者と共に、報告し、討論に参加し、「従軍日誌」も紹介しつつ、同日誌の学問的意義を位置づけし、内容の検証と討論を深めることができた。徳島県の兵士の「従軍日誌」は、こうして学問的意義を認められて、徳島県を2回訪ね、関係者に学問的意義を説明、学術書への復刻、公表の了解を得ることができた。日本の負の歴史に関する記録であり、このような手続を踏んで公開できた意義は大きかった。

(3) 「従軍日誌」の記述は、1894年7月23日応召に始まり、長さは、9メートル余の詳細な記録である。徳島県での応召から松山市での部隊編成、第1中隊第2小隊第2分隊への配属、

戦後、徳島県への帰還に関する部分は、郷土史家や愛媛県の市民の方々の協力を得て、現地調査、記述内容の裏付け調査をすることができていた。仁川への入港からソウルへ入る部分について、韓国の研究者玄明喆氏の協力を得て、行程を実際にたどって裏付け調査をおこない、同じく『人文学報』特集号論文「東学農民戦争、抗日蜂起と殲滅作戦の史実を探究して 韓国中央山岳地帯を中心に」に掲載することができた。

(4)「従軍日誌」の、せん滅大隊が、ソウルを出発し、3路に分かれ、京畿道利川で討伐、処刑を展開、忠清道可興兵站司令部北の東幕里集落を襲撃して交戦、地域の村々を焼き打ちし、さらに東進、忠清道清風北の城内里集落で日本軍に焼き討ちされた村へ着く部分は、研究代表者が、韓国延世大学で開かれた東学農民戦争の研究会に参加し、研究者申榮祐氏と玄明喆氏とともに、京畿道利川市、忠清道忠州市、忠清道蘇台面城内里の現地を訪ねて、郷土史家、博物館員などから聞き取りをしつつ調査、記述内容の裏付けと、当時の戦況を再現し、『人文学報』特集号論文に検証を掲載した。

(5)せん滅部隊が、小白山脈烏嶺峠を越えて、慶尚道へ南下する部分について、慶尚道亀尾市と東学学会共同主催の亀尾市東学農民戦争シンポジウムに参加して報告、この際に、申榮祐氏と東学学会の研究者たちと慶尚道台封、尚州、醴泉など慶尚北道各地の現地調査を行い、せん滅部隊だけではなく、釜山・ソウル兵站線守備隊、台封陣地となった現存する農家、東学農民戦争初期の戦争、石門戦闘などを現地調査することができた。この成果は、一部だけであるが、『人文学報』に掲載することができた。なお今後の調査、検証課題でもある。

(6)「従軍日誌」筆者兵士は、慶尚道から全羅道へ入り、南原、谷城、玉果、綾州へと討伐戦に進撃する、南原から南への討伐について、ソウルで開かれた東学農民戦争シンポジウムで「日本の東学農民戦争研究の成果と課題」を報告、この際に、研究者朴孟洙氏と南原東学農民革命紀年事業会会員らとともに、南原の東学農民戦争の現地調査をおこない日本軍が襲撃、蛟竜山城を焼き払った現地、また南原城跡地を踏査した。農民軍を捕縛し、拷問し、銃殺し、あるいは焼き殺すなど、凄惨な討伐戦が展開されていたことを確かめた。この成果は、全体を『人文学報』特集号に掲載した。

(7)韓国全羅南道珍島郡にて開催された国際シンポジウムに参加し、報告し、忠清道文義・沃川東学農民戦争について報告し、同時に、珍島、海南、康津などの東学農民戦争を現地調査した。文義・沃川戦争については、従来知られていなかった最大規模の地域的戦闘の展開、日本軍による溪谷村々の焼き打ちなどがされたという地域を検証し、『人文学報』特集号に成果を掲載した。

(8)日本軍参謀本部が朝鮮全土を秘密に測量し、日清戦争直前に印刷・配布した20万分の1「朝鮮全図」南北2枚を見いだしていた調査について、防衛研究所図書館にて、調査をつづけた。もともと、20万分の1「朝鮮全図」は、朝鮮北部36枚、南部32枚の地形図として製版されたのであり、比較検証して、参謀本部編纂『明治二十七八年日清戦史』一巻折込付図「第2 混成旅団南進作戦地一覽図」つまり成歡の戦の地形図は、この戦争直前に印刷され20万分の1地形図そのものであり、現地部隊が戦時に使用した地図であった。最初にソウルへ派遣された混成旅団をはじめ、現地派遣部隊に、これらの地形図が計画的に配布され戦争に活用された事実関係を見いだした。そのごく一部を『人文学報』特集号に掲載したが、なお調査を継続、日本軍の日清戦争準備、構想を検証する予定である。

(9)朝鮮北部の黄海道などの東学農民軍を討伐したのは、後備第6聯隊で、部隊が東海北陸地域の兵士で編成され、中心になったのが岐阜県出身の農民兵士であることは、すでに見いだしていた。『岐阜日日新聞』には、この東学農民軍討伐部隊の記事が散見される。朝鮮北部の東学農民軍討伐の指揮官鈴木彰少尉は、黄海道農民軍討伐で新聞記事でも報道されている。この少尉は、大垣藩士上級藩士出身であり、旧宅跡地は大垣市中心部にあり、退役後、大垣町長に就任した。また、東学農民軍との戦いで、黄海道海州で、岐阜県の兵士一人が戦死していることも判明した。討伐部隊が多くの戦病死者を出したことも『岐阜日日新聞』に報じられていた。これまで戦況などが明らかにされていない後備第6聯隊に関する調査は、なおこれからの研究課題である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

井上勝生、東学農民戦争、抗日蜂起と殲滅作戦の史実を探究して 韓国中央山岳地帯を中心に、人文学報・日清戦争と東学農民戦争特集号、査読有、111号、2018、1 65  
井上勝生、東学党討伐兵士の従軍日誌 「日清交戦従軍日誌」徳島県阿波郡、人文学

報・日清戦争と東学農民戦争特集号、査読有、111号、2018、67-91  
井上勝生、内村鑑三と石狩川サケ漁、アイヌ民族、北海道大学大学文書館年報、査読有、12号、2017、1-30、  
井上勝生、十勝アイヌ民族の十勝川共有漁場自営・共有財産取り戻し運動史料 「十勝外四郡土人関係書類」(北海道大学附属図書館北方資料室所蔵)から、北海道大学大学文書館年報、査読有、11号、2016、74-121

〔学会発表〕(計7件)

井上勝生、東学農民戦争と日清戦争、韓国近現代史学会、2018  
井上勝生、抗日蜂起と殲滅作戦の史実を探究して 韓国中央部山岳地帯を中心に、亀尾市(韓国慶尚北道)・東学学会、2016、  
井上勝生、北海道の歴史と東アジア、第15回東アジア青少年歴史体験キャンプ実行委員会・アジアの平和と歴史教育連帯・中国社会科学院近代史研究所、2016  
井上勝生、アイヌ民族近代史を問い直す 日清戦争前後を中心に、京都大学人文科学研究所、国際シンポジウム「日清戦争期の東アジア」、2016  
井上勝生、日本軍による東学農民軍虐殺の真相 文義・沃川戦争を中心に、全羅南道(韓国)・霊岩大学校、2016全羅南道文化観光財団国際学術大会、2016  
井上勝生、日清戦争と明治維新の東アジア史的立場を検討するために、京都大学人文科学研究所、国際シンポジウム「日清戦争と東学農民戦争 - その東アジア史的立場」、2015  
井上勝生、埋もれた日清戦争、抗日東学農民戦争と日本のせん滅作戦 日本と朝鮮、歴史の史実と記憶、四国地域史研究連絡協議会・高知近代史研究会、2015

〔図書〕(計4件)

井上勝生他、「第15回東アジア青少年歴史体験キャンプ」実行委員会事務局、東アジアの和解・未来 歴史と市民、2017、127(12-19)  
井上勝生他、モシヌンサランドル社(韓国)、慶尚道亀尾東学農民革命、2016、286(89-113)  
井上勝生他、全羅南道文化観光財団(韓国)、珍島東学農民革命の東アジア的意味と位相、2016、275(91-141)  
井上勝生他、在日韓人歴史資料館、朝鮮近現代史から日本を問う 在日韓人歴史資料館10周年記念土曜セミナー講演録、2015、146(3-47)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。